

〈論文〉

南琉球・多良間島方言の「移動の表現」に関わる動詞の類型(2)

ーモノの移動の表現ー

下 地 賀代子

はじめに

本研究では、「人や物体が空間内の一つの点から別の点に移動する」(岡田2003:102)という事象を言語的に表すことを「移動の表現」と呼んでいる。本稿に先行する下地2016では、多良間島方言の「ヒト=イキモノの空間的な移動を表す動詞」を「格の形式・その格の名詞がある動詞とともに用いられることによって表す語彙ー文法的意味・その動詞の語彙的意味という三者の相互関係という観点」(岡田2000:101)から分析・考察し、そこに4つの類型ー「出ル」類、「通ル」類、「入ル、着ク」類、「行ク、来ル」ーをみとめた。なおこれらの動詞には、寺村1982が示した「動的事象の描写」¹の文のタイプの1つである「移動・変化の表現」(pp.102-121)のうちの、〈移動〉を表す動詞が相当する。

本稿では多良間島方言の「モノの移動の表現」として、寺村1982による文のタイプのうちの「入レル、出ス」表現ー働きかけと移動の複合」および「授受の表現ー働きかけの対面と移動の複合」に関わる動詞を取り上げ、それらの語彙・文法的な意味²の記述を試みる。用例の表記については以下の通りである。

- ・ 1行目に音韻表記³、2行目に語単位の逐語訳⁴、3行目に全体の意識⁵を示す。
- ・ 一部略号を使用(「COP」: コピュラ(連辞)、「PLN」: 複数を表す名詞的要素、「OBL」: 当為・義務、「INTJ」: 間投詞、「DIM」: 指小辞、「SPC」: 〈中、内〉という語彙的意味を名詞に付加する接辞的要素⁶)
- ・ 音韻表記、逐語訳ともに助辞の切れ目に「=」を付す。
- ・ たずね文などにおける語尾の上昇を「ka[ki] (書く?)」のように示す。

1. 対象的な空間的な移動を表す動詞の類型

「モノの移動の表現」を、「し手」が「第一の対象」に直接的あるいは間接的に働きかけて、その働きかけの結果、「第一の対象」の空間的な位置が変化することを表す表現、と規定する。この表現には大きく2つのタイプが見られ、寺村1982の下位分類では、「入レル、出ス」表現」と「授受の表現」の一部がこれに関わる。寺村1982ではこれらの表現を、それぞれ「働きかけと移動の複合」、「働きかけと対面と移動の複合」と規定している。「入レル、出ス」類の動詞について、このタイプには下地2016で見た「出ル」「通ル」「入ル、着ク」類の動詞と形態的に対立する他動詞、あるいはその使役形などが含まれている。また、授受表現に関わる動詞について、〈し手〉、〈相手〉、〈働きかけの対象〉の関わり方から、「与エル」類、「受ケル」類、「ヤル、モラウ、クレル」類、「命ジル」類の4つが区別され

ている。

次節では、これらのうち具体的な空間的な移動の表現に関わるものとして、「入レル、出ス」類の動詞と、「授受の表現」のうちの「命ジル」類を除いた3種の類の動詞について見ていく。

なお「入レル、出ス」類の動詞について、奥田1968-1972では主に「とりつけのむすびつき」「とりはずしのむすびつき」「うつしかえのむすびつき」という、「物にたいするはたらきかけをあらわす連語」の下位カテゴリーの中で扱われている。それぞれのカテゴリーは次のように規定されている。

- ・「とりつけ」－「第一の対象を第二の対象にくっつける」という関係を表し、「第二の対象」を指し示す二格あるいはへ格の名詞は必須の要素となっている。
- ・「とりはずし」－「第一の対象が、動作のはたらきかけをうけて、第二の対象からとりはずされる」という「とりつけ」とは対称的な関係を表すが、その「第二の対象」を指し示すから格の名詞は必ずしも必要ではない。
- ・「うつしかえ」－「はたらきかけをうける物は空間的な位置変化をするだけにとどまる」ものであり、「場所をあらわすに格あるいはへ格、から格あるいはまで格の名詞でひろげられて、意味的な完結性をもつことができる」。

（言語学研究会編1983：27-36より）

そして奥田1968-1972は同時に、これらのカテゴリーの境界をあいまいにする中間的な動詞の存在も指摘している。例えば、動詞イレルには「とりつけ」と「うつしかえ」、動詞ダスには「うつしかえ」と「とりはずし」それぞれの結びつきを実現している用例があり、「うつしかえととりつけとの、うつしかえととりはずしとの、ふたつのカテゴリーの連続性」が示されている（同上：35-36）。また、岡田2003はこの奥田による一連の考察を踏まえ、

1. 移動全体のうちのどの部分が示されるか、ということとの関連で、「○○を」以外の、物体あるいは空間を表す名詞（句）の格形式はどうであるか
2. 物体の移動がどのようにとらえられているか（接着か分離か移動か、など）ということとの関連で、「○○を」以外の名詞（句）によって示されるものは何か（物体か空間か、など）

という2点に注目しつつ、上記のカテゴリーが「動詞の語彙的意味のどのような特性を反映しているものなのかを考察し、それを手がかりとして、物体を移動させることを表す他動詞の語彙的意味の形式に基づく、より客観的な記述」を試みている（p105）⁷。

以上の先行研究をふまえ本研究では、「入レル、出ス」類の動詞について、その「モノの移動」あるいは働きかけの〈方向〉が「第二の対象」に対して「近づく」ものであるか「離れる」ものであるかを手がかりとし、下位区分して扱うこととする（下記a、b）。また、移動の〈起点〉や〈着点〉を指し示す名詞との関わりではなく、「物体を移動させること自体が問題」（岡田2003:110）となるような動詞もみとめられる。その多くはa「入レル」

類とb「出ス」類の動詞のいずれにも重なりうる、言い換えればいずれの〈方向〉が示されているのが明らかではないことから、これを先の2つの中間的なものとして扱うこととする(c)。

「入レル、出ス」類-a.「入レル、置ク」動きを表す動詞(‘近づく’)

b.「出ス、取ル」動きを表す動詞(‘離れる’)

c.「空間的な位置変化」を表す動詞類

2. 多良間島方言の対象的な空間的な移動を表す動詞

2-1. 「入レル、出ス」類の動詞

2-1-1. 「入レル、置ク」動き

まず、「入レル」動きを表す動詞について、このタイプの動詞はju格、ba格⁸、Ø格の名詞が指し示す第一の対象を第二の対象に「くつつける」ことを表す。第二の対象の名詞がN格とNka格のいずれの形式をとっていても、そのくつつけられ方は〈包含〉である。なお、ni:格の用例はほとんど見られない⁹。またiziL(入れる)¹⁰などとのくみあわせでは、その第二の対象の名詞はNka格で現れやすい(例1)。これは、「「入ル」動きに関わる動詞にNka格の名詞とのくみあわせを好む傾向がみとめられること」(下地2016:54)と並行的である。ここでは第一の対象を破線、第二の対象を波線によって示す。

- (1) ~ aM=tu_ izi=to:, Mme o:da=Nka izi:, kare:sjiqti:,
 網=と 魚=と.を INTJ もっこ=に 入れて 両端を結んで
 網と魚をもっこに入れて、{note.もっこの} 両端を結んで、
- (2) asjaMma=nu Mme=N qsaiN=gutu=nana, kaqfi:tui: nara=ga
 父母=の PLN=に 申さない=で {ごと} =まま 隠して 自分=の {が}
 niNdukuru=Nka kaqfi: uciki:tui:,
 寝どころ=に 隠して 置いていて
 両親に申しあげないまま隠して、{note.女を} 自分の寝床に隠して置いていて、
- (3) kunu_ munudane:, miduM=nu itaM=nu naka=N pasjami: kitaL munu sji:=du,
 この もの種.は 女=の 下着=の 中=に はさんで 来た もの.Ø して=ぞ
 この種は、女の下着の中にはさんで来たもので、

だがui(上)など、第二の対象の名詞が「一定範囲の空間」(宮島1972:563)を指し示すものではない場合、そのくつつけられ方は〈表面への付着〉となる。このとき、第二の対象の名詞はN格の形で現れている(例4)。

- (4) kunu mekarusji:=ti:=nu pito:, uru: mi:qti: ja:=nu ui=N
 この 銘苺子=と=の 人は それ.を 見て 家=の 上=に
kiN=ju kaqfasitaL=ci:=ba=du,
 着物=を 隠した=らしい {といい} =ば=ぞ
 この銘苺子という人はそれを見て、家の上に着物を隠したそうで、

また、共通語の場合、以下の例の「葉に青蝇（を）包む」というようなくみあわせでは、その「葉に」が、「とりつけのむすびつきをあらわす連語のなかの、第二の対象をあらわすに格であるか、ふるくさい道具のに格であるか、判断にこまる」ことがある（言語学研究会編1983:30）。二格に対応するN格にも〈手段・方法〉の意味を表す用法は見られるのだが、多良間島方言の場合、〈内部性〉¹¹を表すNka格形式を用いることによって、そのような混乱が避けられている。なお、上の例3でも第二の対象を表す名詞はN格の形をとっているが、相対名詞naka（中）を伴うことによって〈包含〉の意味が明確になっている。

- (5) kaqsagapa:=Nka, aubai=nu pitu=kara cicimi: muti: ki=ba,
 大きい葉=に 青蝇=の 1=匹.Ø 包んで 持って 来=ば
 大きい葉に、青蝇を1匹包んで持って来る（ft.来た）ので、

また、第二の対象の名詞がNke:格をとって現れている用例も多く現れている。いずれの用例でも第二の対象の名詞が指し示すのは「一定範囲の空間」を持つモノであることから、そのくっつけられ方もやはり〈包含〉であると言える。またこのとき、第二の対象の名詞には空間化の接辞的要素-Nkaが伴われやすい（例8、9）。

- (6) sjuko: ne:N u:ki=u bisjiqti:, mizi=u uL=Nke: cimi: mi:ru
 底は ない 桶=を 据えて {座らせて} 水=を それ=へ 詰めて みろ
 底は（ft.が）ない桶を据えて、水をそれに詰めてみる（と、）
- (7) futa:L=nu jerai pitu:=mai sono:, nabi=Nke: usikumiL=tu do:zji=N,
 2人=の 偉イ 人.を=も ソノー 鍋=へ 押し込める=と 同時=に
 2人の偉い人もソノー、鍋へ押し込めると同時に、
- (8) kami=Nka=Nke:, ti:=ju nuqfiL=ba=du,
 甕=SPC=へ 手=を 突っ込め=ば=ぞ
 甕（の）中に手を突っ込むと、
- (9) muti: kitaL aubai=ju, miduMqva=nu pana=nu mi:=Nka=Nke: kumiL=ba=du,
 持って きた 青蝇=を 女の子=の 鼻=の 穴=SPC=へ 込めれ=ば=ぞ
 持ってきた青蝇を女の子の鼻の穴へ込めると、

続いて「置ク」動きを表す動詞について見ていく。「入レル」動きを表す動詞の場合と同じく、ju格やba格、Ø格の名詞が指し示す第一の対象を、N格、Nka格、ni:格の名詞が指し示す第二の対象にくっつけることを表す。ただし、このとき表わされる第一の対象のくっつけられ方は〈表面への付着〉である。

- (10) Mme pituta:ra rokuzjuqkiN=mai aL a:da:ra futa=N nu:sjiqti:,
INTJ 一俵 60斤=も ある 粟俵.Ø 肩=に 乗せて
もう一俵60斤もある粟俵(を)肩に乗せて、
- (11) pisigaL ti:=N=du muno: ukaL.
広がる 手=に=ぞ 物.は 置ける
広がる手にこそ物は置ける。{note.気前が良い人に幸運は訪れる、の意の諺}
- (12) taNsi=u nibaNzja:=Nka uciki.
ダンス=を 二番座=に 置く
ダンスを二番座に置く。
- (13) paru=Nka mugi=u maki:
畑=に 麦=を 播いた {播きあり}
畑に麦を播いた。
- (14) nabi=u kama=ni: bisjitaL.
鍋=を かま=に 据えた
鍋をかまどに据えた。

だが、以下の例15のnaka(中)のように、「一定範囲の空間」を指し示す名詞が第二の対象の位置に現れている場合、そのくっつけられ方は〈包含〉となる。このとき、第二の対象を表す名詞はNka格形式をとって現れる。

- (15) jakuniN=nu Mme:, cib=nu naka=Nka kagaM=ju ucikiqti:,
役人=の PLN=は 壺=の 中=に 鏡=を 置いて
役人達は、壺の中に鏡を置いて、

なお、次の例16の第二の対象の名詞は、くっつける対象というよりも「背景としての空間」(岡田2003:106)を示しているようである。

- (16) paL=nu jukadu=N, misi, da:gu, ubuNzju:=ju ciqfi: sjunairu
畑=の 四角=に 神酒 団子 (料理名) =を 作って 供えろ
畑の四角に、神酒、団子、青菜の和え物を作って供えなさい(と)、

2-1-2. 「出ス、取ル」動き

まず「出ス」動きを表す動詞について見る。このタイプの動詞は、ju格、ba格、Ø格の名詞が指し示す第一の対象を、kara格の名詞が指し示す第二の対象あるいは第一の対象が属するところから、〈排出〉することを表す。なお、この〈排出〉の起点（＝「排出元」）は明示されない場合も少なくない（例19）。

- (17) unu pikima=kara Mme, zjuN:zjuN_muno: qfa=gama: idasji:,
 その 隙間=から INTJ 真 (の) もの.は 子=DIM.は 出して
 その隙間からもう、真 (の) ものを {note.まさにその飛び着物を} 子どもは出して、
- (18) ba=ga tiN=kara, Nna=u urusjaqzji:,
 私=が 天=から 縄=を 下ろすので
 私が天から縄を下ろすので、
- (19) haNdai=ju Ndasji:.
 飯台=を 出せ
 飯台を出しなさい。

また、第二の対象がN格やNke:格の空間名詞である場合、その第二の対象の名詞は「排出先」あるいは「排出の方向」を指し示す。

- (20) baNta=ga qfa=u saNbasji=N urusji: qfi:ru.
 私たち=の {が} 子=を 棧橋=に 降ろし くれろ
 うちの子を棧橋で降ろしてくれ。
- (21) upudatiMniaz i=nu, takaramunu:=ba:, kanuju:=Nke:=nu cicitu=ti:, nagasjakiiM=nu,
 大立峰按司=の 宝物.=をば あの世=へ=の みやげ=と 長崎海=の
ufuricizi=N sutati: wa:Ltari:=du,
 ウフリツツ=に 放り出して なさったので=ぞ
 大立峰按司の宝物を、あの世へのみやげと、長崎海のウフリツツに放り出しなだったので、

この「出ス」類の動詞を述語する文では、その動詞が表す移動の「排出元」すなわち起点がkara格の名詞や文脈などによって常に明らかであるのに対し、「排出先」「排出の方向」は必ずしも明示されない。このことから、このタイプの動詞の語彙・文法的な意味には「離れる」という「方向性」がみとめられる。つまり、「出ス」動きを表す動詞は、「くっつけられるところ」＝着点を表す名詞を要求する「入レル」動きを表す動詞（「近づく」と、この「方向性」において対称的であることがわかる。以下に挙げる用例では、その補助動詞iki（行く）、ki:（来る）の語彙・文法的な意味によって、例22では「出ス」動きを表す動詞に、例23では「入レル」動きを表す動詞に共通する「方向性」がそれぞれ示されている。

- (22) futa:L=ja sjo:daN=ju sji:, uLkara kunu kugani=nu Mme=u pise: iki:,
 2人=は 相談=を して それから この 黄金=の PLN=を 拾って 行って
 2人は相談をして、それから {note.洞窟から} この黄金などを拾って行って、
- (23) sjaki usjai=ja, ba=ga jamasike: muti: ki: uki=ba,
 酒.Ø 肴=は 私=が 山ほど 持って 来て おけ=ば
 酒、肴は私が山ほど {note.ここに} 持って来てあるので、

続いて「取ル」動きを表す動詞について、このタイプの動詞は、ju格やba格、Ø格の名詞が指し示す第一の対象を、kara格の名詞が指し示す第二の対象あるいはそれが属するトコロから〈分離〉することを表す。

- (24) e:bigu:=nu naka=kara munu:=du turi:L.
 アワビ=の 中=から もの.を=ぞ 取っている
 アワビの中からものを {note.中身を} 取っている (ft.取ってある)。
- (25) to:to:, nama, ja:=nu kadu=nu ke:=ju Ngi: ku:
 さあさあ 今 家=の 角=の 茅萱=を 抜いで 来い
 さあさあ、今、家の角の茅萱を抜いておいで (と)、
- (26) uL=ga tubikiN=ba nusimi: kakigu: sji: wa:LtaL=ti:
 それ=の {が} 飛び着物=ば 盗んで 保管.を して なさった=と
 {note.銘苅里之子は} それ {note.天女} の羽衣を盗んで、大事にしまい込みなされた
 そうだ。

2-1-3. 「空間的な位置変化」を表す動詞

このタイプの動詞は、移動の起点や着点を表す名詞との関わりよりも、第一の対象の「空間的な位置変化」(言語学研究会編1983:34)を表すことをその意味の中心に据えている。よって、起点・着点の明示は義務的ではなく、その移動の方向性も第二の対象がいずれの格形式をとっているかなどによって異なる。

- (27) nu:=Nke: piNda=u panasji: fusja=u fa:sitaL.
 野=へ 山羊=を 放して 草=を 食わせた
 野原に山羊を放して草を食べさせた。
- (28) maruki: uki Nna=u paqzji: piNda=u panasitaL.
 縛って おく 縄=を 外して 山羊=を 放した
 縛っておいた縄を外して {note.そこから?} 山羊を放した。

2-2. 授受の表現

授受表現に関わる動詞は、モノの移動に関わるトコロあるいは狭い意味での「対象」ではなく、動きの及ぶ「相手」を要求する点で、前節で見た「入レル、出ス」類の動詞とは異なっている¹²。よってその動きには、「モノ」¹³の「与え手」と「受け手」が存在し、「与エル」動きであるか「受ケル」動きであるかによって、その動詞が表す動きの「し手」と「相手」は異なってくる。そして、「ヤル、モラウ、クレル」類の動詞（いわゆる「やりもらい」動詞）には、動作の主体と客体のどちらを主語とし、また補語とするかに関わるヴォイス的な側面、すなわち、「し手」と「相手」についての「特殊な関係的制限」（寺村1982:127）がみとめられる。これらの動詞はこの制限によって、「与エル」、「受ケル」類の動詞から区別して扱われることになる。多良間島方言のやりもらい動詞は、共通語とは異なり、「くれる」と「もらう」にそれぞれ対応するqfiLとjuiLとの、「クレ・モライ」とでも言うような二項対立を示している。但しqfiL（くれる）には、その動きの「し手」と「相手」のいずれが主語であるかによって異なる敬体動詞が用いられることから、意味的にはヤルとクレルという使い分けがあるものと考えられる¹⁴。

以下、「与エル」類、「受ケル」類の動詞と、「ヤル、モラウ、クレル」類の動詞について、それぞれの意味・用法を考察していく。

2-2-1. 「与エル」動き、「受ケル」動き

まず「与エル」動きを表す動詞について見る。このタイプの動詞は、「し手＝与え手」が、「自分の所有するもの、ないし自分に属するもの、自分の支配下にあるもの」を、「相手＝受け手」へと「移す」ことを表す（寺村1982:127）。このとき移動する「モノ」は、ju格、ba格、Ø格の名詞によって指し示される。また、「し手＝与え手」を表す名詞は主語としてga格、nu格形式をとって現れ、「相手＝受け手」を表す名詞は、N格やNke:格をとって現れる。ここでは、「し手」を二重線、「相手」を波線、移動する「モノ」を破線によって示す。

- (29) aNna=Nke: zjiN=ju azuki: kitaL.

母＝へ 銭＝を 預けて きた

お母さんにお金を預けて来た。

- (30) oni=nu meN=ju miduM: turasi=ba=du,

鬼＝の 面＝を 女に 渡せ {取らせ} =ば=ぞ

{note.間違えて買って来た} 鬼の面を女 {note.奥さん} に渡すと、

- (31) uja=ga sju:=Nke: sjaki=ju we:sji: wa:LtaL.

父 {親} =が 祖父 {主} =へ 酒＝を 差し上げて なされた

お父さんがおじいさんにお酒を差し上げなされた。

次に「受ケル」動きを表す動詞について、このタイプの動詞は、上の「与エル」類の動詞とは逆の、「相手＝与え手」から「し手＝受け手」への「モノの移動」を表す。このとき、主語として差し出されるのは「し手＝受け手」である。また、「相手＝与え手」を指し示す名詞は、kara格の形式をとって現れる。

- (32) na:ta=ga.....nabi=u=ba: oba:saN=ga=du kari: wa:LtaLru=ga
 自分たち=の {が} 鍋=を=ば オバーサン=が=ぞ 借りて なさった=が
 うちの鍋はオバーサンが借りなされたけど (と)、
- (33) karasitaL okone=ju=mai ukiN=na. ureikiN=ju sjuiL=ba=ti:,
 貸した {借らした} オ金=を=も 受ける=な 御礼金=を 添えれ=ば=と
 貸したお金も {note.友達から} 受け (と) るな。御礼金を添えるからと、
- (34) tunaLmura=nu zjiNmuci=mai, tukidukē: kunu sj:niN=kara izi=u
 隣村=の 錢持ち=も 時々.は この 青年=から 魚=を
ke: butaL=gi munu.
 買い いた=気 もの
 隣村の金持ちも、時々は、この青年から魚を買っていたそうだ。

また、より抽象的な「コトガラ」の「授受」を表す動詞も、具体的な空間的な移動の表現とは言えないが、「与エル」「受ケル」類の動詞には含まれる。上で示した動詞の場合と同じく、「与エル」動きの「相手」はN格の名詞によって、「受ケル」動きの「相手」はkara格の名詞によって、それぞれ指し示される。

- (35) uja=ga=du qfa=N munu: nara:si=do:.
 親=が=ぞ 子=に もの.は 教える {習わす} =よ
 親が子どもに道理を教えるんだよ {note. 子どもを教導くのは親の役目だ、という意}
- (36) oba:=kara nu:=ju=ga naru:=buqsa:L=ti:.
 おばー=から 何=を=か 習い= (し) たい {欲しい} =と
 おばーから何か習いたい (んだ) って。

その他、双方向的な「授受」を表すkaiL (換える)、ko:kaNsi: (交換する) や、「受ケル」動きの後の実現を含意しつつ「与エル」動きを表すkaisi (返す) のような動詞もある。これらは、「与エル」類の動詞と「受ケル」類の動詞の中間的なものとして位置づけられそうである。

- (37) uL=u muti: iki: qva: nu:=ga sju:zi:=ga, hai ba=ga
 それ=を 持って 行って あなた.は 何=か しょう=か はい 私=の {が}

kugani=nu aL=ba, zju:zju: kairu

黄金=が {の} あれ=ば さあさあ 換えろ

それ {note.娘の魂} を持って行ってあなたはどうか、おい、私が黄金を持っているから、さあさあ {note.それと黄金を} 換えろ (と)、

(38) kaNke: isi=nu pikiusē: de:N takaramunu=nu aL=ba, uL=tu ko:kaNsji

彼らは 石=の 挽き臼は 最も 宝物=が {の} あれ=ば それ=と 交換しろ

彼ら (に) は石の引き臼は、1番 (の) 宝物があるから、それと {note.この木の実を} 交換しなさい (と)、

(39) uMma=gama=nu nabi=u kaisi=ga iki=ba=du,

祖母=DIM=が {の} 鍋=を 返し=に {が} 行き=ば=ぞ

おばあさんが鍋を返しに (東隣へ) 行くと、

2-2-2. 「ヤル、モラウ、クレル」動き

最後に、いわゆるやりもらい動詞について見ていく。先述したように、多良間島方言では共通語の「くれる」と「もらう」に対応するqfiLとjuiLが形態的な二項対立を示しているのだが、qfiLにはその動きの「し手」と「相手」のいずれが表現主体であるかによる使い分けがみとめられ、意味的には三項対立となっている。

qfiLについて、まず、ju格やba格、Ø格の名詞によって指し示される「モノ」が、「し手=与え手」から「相手=受け手」のもとへと移動すること、すなわち「ヤル」動きを表す用法がある。この場合「し手=与え手」を指し示す名詞は主語となり、ga格やnu格形式で現れる (例41)。なお、「し手=与え手」がkara格形式で示されることもある (例42)。また、「相手=受け手」はN格あるいはNke:格の名詞によって差し出される。

(40) kuL=u qva=Nke: qfizi:

これ=を あなた=へ くれよう

これをあなたにやろう。

(41) usjuganase:, “qva: irai pekusjo:=sjaika” =ti: pumi:, ho:bi=u,

御主加奈志は あなたは 偉い 百姓=だ=と 褒めて 褒美=を

qfi: jarasji: wa:LtaL=ti:

くれて 遣らして なさった=と

王様は、「あなたは偉い百姓だ」と褒めて、(男に) 褒美をやって、遣らしなされた {note. 島に帰らせた} そうだ。

(42) sju:, uL=u=ba: qva=kara qfi: wa:ri.

祖父 それ=を=ば あなた=から くれて なされ

おじいさん、これはあなたからあげてください。

また、基本的に「し手＝与え手」が表現主体となることから、その敬体動詞としては〈謙譲〉を表す *we:sjiL* が用いられる。この動詞は意味的に「差し上げる」に対応しており、常体動詞 *qfiL* は目上から目下への、敬体動詞 *we:sjiL* は目下から目上への「モノの移動」を表す。但し、表現主体が第三者であり、「し手＝与え手」がその表現主体にとって目上である場合は、さらに〈尊敬〉の補助動詞 *wa:L* が伴われる (例44)。

- (43) *sji:du*, *N:*, *kamisama=Nke:* *we:sji:L* *usunaimunu:*,

それで INTJ カミサマ＝へ 差し上げている お供え物は

それで、ん、(男が) 神様へ差し上げているお供えものは、

- (44) “*a:*, *ba=ga=du* *Nna=u* *muti:* *buL=ba* *de:*”=*ti*, *e:* *we:sji:* *wa:Ltakara:=du*,

INTJ 私＝が＝ぞ 縄＝を 持って いれ＝ば さあ＝と INTJ 差し上げて なさったら＝ぞ

「ああ、私が縄を持っています、さあ」と、(おじいさんがその縄を) 差し上げなされると、

また *qfiL* には、対格名詞が指し示す「モノ」の「し手＝与え手」から「相手＝受け手」への移動が、後者の側から捉えられていることを表す用法もみとめられる。このとき、「し手＝与え手」が主語として現れて、「相手＝受け手」がN格あるいは *Nke:* 格の名詞によって差し出される点は「ヤル」動きと変わらないのだが、「相手＝受け手」によってそのデキゴトが捉えられている (≡表現主体となっている) ことから、「ヤル」ではなく、「クレル」動きを表していることがわかる。

- (45) *uL=u* *baNke:* *qfiru.*¹⁵

それ＝を 私へ くれろ

それを私にくれ。

- (46) “*a:*, *ara* *ba=ga*, *pi:se:* *agi:* *kamiqsa=ba*, *qva=ga*, *miduMqva=u*

INTJ では 私＝が 拾って あげて 担がさ＝ば あなた＝の {が} 女の子＝を

nara=N *qfiN:=na*”=*ti:*, *wa:L=ba*,

自分＝に くれる＝な＝と おっしゃれ＝ば

「あーでは、私が、拾い上げて担がせたら、あなたの娘を自分にくれるか」とおっしゃるので、

そしてこの場合、その表現主体が「相手＝受け手」であることから、その敬体動詞としては *qfi: wa:L* (くれなさる)¹⁶ という〈尊敬〉の動詞が用いられる (例47)。つまり、常体動詞 *qfiL* は目下から目上への、敬体動詞 *qfi: wa:L* は目上から目下への「モノの移動」が表されており、「ヤル」動きの場合とちょうど逆の方向になっていることがわかる。

- (47) tunaL=nu sju:=ga=du ju:zju=gama qfi: wa:LtaL.
 隣=の おじいさん {主} =が=ぞ ままごと=DIM.Ø くれて なさった
 隣のおじいさんがままと (道具) を下さった。

ここまでの記述から、多良間島方言の動詞qfiLは、「与え手」と「受け手」のいずれが表現主体であるか、言い換えれば、いずれが第1人称の代名詞によって指し示されるかによって、「やる」と「くれる」という2つの異なる動詞に対応する用法を示すということが明らかになった。そしてその2つの用法の間には、iki (行く) とki: (来る) の場合と同様の、動きの方向の対称性が窺えた¹⁷。また、qfiLには補助動詞としての用法も見られるのだが、「モノの移動」だけでなく、「相手」への働きかけを表す場合にも、その働きかけの「方向」によって敬体動詞が使い分けられている。

- (48) reN=ti:=nu munu=mai, kanagai=ja, ju:zju, pi:zju=N=ja,
 聯=と=の もの=も 昔=は 祝い (ju:zjuの対語) =に=は
 (中略) kazjari: we:sitaL=sja.
 飾りって 差し上げた=さ

聯というものも、昔は、祝いには、(中略) 飾って差し上げたよ。

- (49) iqtuk i nara=N, rjukju:o:sama=nu fukuso:=ju, karasji: qfi: wa:ri
 一時 自分=に リューキューオーサマ=の 服装=を 借らして くれて なされ
 一時、私に琉球王様の服を貸して下さい。

続いてjuilについて見ていく。この動詞は、ju格やba格、Ø格の名詞に指し示されている「モノ」が、「受け手」側からの働きかけによって「相手=与え手」から「し手=受け手」へ移動することを表わしている点で、qfiLが表す「モノの移動」とは異なっている。この時、主語として差し出されるのは「し手=受け手」である。また「相手=与え手」は主にkara格で示される (例51)。

- (50) aNsji:=du ke:, to:bo:sju:=ga qva=u juizi:=ti wa:L.
 そのように=ぞ INTJ トーボー主=が あなた=を もらおう=と おられる
 そのように、トーボー主があなたをもらいたいとおっしゃっている、
- (51) mma=kara fusi=u juitaL.
 祖母=から 櫛=を もらった
 {note.私は} おばあさんから櫛をもらった。

表現主体は基本的に「し手＝受け手」であるが、以下の例52のように、「相手＝与え手」が表現主体となる場合もある。このとき、「し手＝受け手」が目上ならば *jui wa:L* (貰いなさる) という敬体動詞が用いられる。

- (52) *kunu ja:=nu jumi=nu, aparagi miduM=ba sji: kuL=N puri: uki=gi munu,*
 この 家=の 嫁=の 美しい 女=ば して これ=に 惚れて おく=気 もの
asjugadu, “kure: [ba=ga bunal ari:, jui: wa:ri]” =ti:=nu ba:=ju sji:,
 だけど これ=は 私=が 姉/妹.Ø COP もらって なされ =と=の 場合=を して
 この家の嫁が美しい女で、{note.首里王子は} この人に惚れたらしい、だけど、「こ
 れは私の妹だから、もらってください」と言って、

また、「相手＝与え手」が表現主体となる文で *juiL* が補助動詞 *qfiL* (～くれる) とあわさって現れている場合、「受け手」から「与え手」(＝表現主体) への、〈受益〉のニュアンスが伴われる¹⁸。

- (53) “*haihai, uL=u=ba: qva=N qfidaka: [baN]=ja tau=N=ga qfi*
 はいはい それ=を=ば あなた=に くれなければ 私=は 誰=に=か くれ
gumata=ga. kanarazu qva=ga je:¹⁹ qfiru.” =ti i:=ba,
 OBL=か 必ず あなた=が 貰い くれろ=と 言い=ば
 「はいはい、これをあなたにやらなければ、私は誰にやるべきか。必ずあなたがもらっ
 てくれ」と言うので、

3. 多良間島方言の対象的な空間的な移動を表す動詞の類型

以上、多良間島方言の「モノの移動」の表現に関わる動詞について記述を試みてきた。ここまでの考察の内容を以下に示してまとめとする。なお、各類の動詞の語例には本稿では用例として挙げなかったものも含んでいる。

1. 「入レル、置ク」動きを表す動詞

a 「入レル」類：

- ・ *ju* 格や *ba* 格、 \emptyset 格の名詞が指し示す第一の対象を、*N* 格、*Nka* 格、*Nke* 格の名詞が指し示す第二の対象に「くっつける」(〈包含〉) ことを表す。
- ・ 第二の対象が「一定範囲の空間」を指し示す名詞ではない場合、その名詞は *N* 格をとり、そのくっつけられ方は〈付着〉となる。

ex. *iziL* (入れる) *kumiL* (込める) *nuqfiL* (突っ込む) *kakiNki* (掻き込む) *kaqfi* / *kaqfasi* (隠す)
uziM (埋める) *ho:muL* (葬る) *ciciM* (包む) *pasjaM* (はさむ) *cimiL* (詰める) *muti: ki:* (持つて来る) …

b「置く」類：

- ・ju格やba格、Ø格の名詞が指し示す第一の対象を、N格の名詞が指し示す第二の対象に「くっつける」(〈接触〉から〈付着〉)ことを表す。
- ・第二の対象が「一定範囲の空間」を指し示す名詞である場合、その名詞はNka格をとり、そのくっつけられ方は〈包含〉となる。

ex. uciki (置く) ukaL (置ける) muL (盛る) sjagiL (下げる) nu:sjiL (乗せる) jurasi (浮かす {揺らす}) niniqsi (寝かす) kaqvasi (被せる) sjunaiL (供える) maki (蒔く) bisjiL (据える) ciM (積む) …

2. 「出入、取ル」動きを表す動詞

c「出入」類：

- ・ju格やba格、Ø格の名詞が指し示す第一の対象を、kara格の名詞が指し示す第二の対象あるいは第一の対象が「属するトコロ」から〈排出〉することを表す。
- ・「排出先」「排出の方向」を表すN格、Nke:格の空間名詞によって広げられる。

ex. idasi / Ndasi, nuNdasi (出す) sutatiL (放り出す) urusi (おろす) utusi (落とす) ukuL (送る) kubaL (配る) piNgasi (逃がす) fukasi ((糞尿などを) もらす) muti:iki (持って行く) pise:iki (拾って行く) …

d「取ル」類：

- ・ju格やba格、Ø格の名詞が指し示す第一の対象を、kara格の名詞が指し示す第二の対象から〈分離〉することを表す。但し、第二の対象は必ずしもkara格の名詞でしめされているわけではない。

ex. tuL (取る) Ngi (抜く) paqzi (外す) …

3. 「空間的な位置変化」を表す動詞類：

- ・移動の起点や着点を表す名詞との関わりよりも、第一の対象の「空間的な位置変化」を表すことがその意味の中心となっている。

ex. panasi (放す) jaL (投げる) sitiL (捨てる) pikiagiL (引き上げる) mucu (持つ) kakagiL (掲げる) …

4. 「与エル」類：

- ・「し手＝与え手」が与え手のモノを「相手＝受け手」へと「移す」ことを表す。
- ・移動するモノはju格やba格、Ø格の名詞、「し手＝与え手」はga格やnu格の名詞、「相手＝受け手」はN格、Nke格の名詞によって指し示される。

ex. turasi (渡す {取らす}) karasi (貸す {借らす}) qvi (売る) usjagiL (奉げる、供える) nara:si (教える {習わす}) paru: (払う) kaisi (返す) …

5. 「受ケル」類：

- ・「相手＝与え手」から、「し手＝受け手」への「モノの移動」を表す。
- ・移動するモノはju格やba格、Ø格の名詞、「し手＝受け手」はga格、nu格の名詞、「相手＝与え手」はkara格の名詞によって指し示される。

ex. ukiL (受ける) azukaL (預かる) kaL (借りる) kau / ko: (買う) baku: (奪う) nusuM (盗む) naru: (習う) …

6. 双方向的な「授受」を表す動詞：

- ・「与エル」類と「受ケル」類の中間的な動詞として位置づけられる。

ex. kaiL (換える) ko:kaNsi: (交換する) tuLkaiL (取りかえる) …

7. やりもらい：

- ・多良間島方言では「くれる」と「もらう」に対応するqfiLとjuiLが、形態的な二項対立を示しつつも意味的には三項対立となっている。
- ・qfiLは「し手＝与え手」から「相手＝受け手」への「モノの移動」を表す。このときモノはju格やba格、Ø格の名詞、「し手＝与え手」はga格、nu格、kara格の名詞、「相手＝受け手」はN格、Nke:格の名詞によって示される。
- ・qfiLは「し手＝与え手」と「相手＝受け手」のいずれが「表現主体」であるかによって、ヤルとクレルという異なる意味を表す。
- ・juiLは「相手＝与え手」から「し手＝受け手」への「モノの移動」を表す。このとき、主語として現れるのは「し手＝受け手」である。

表. 多良間島方言の「やりもらい」動詞の体系

	意味	「モノ」の移動の方向	表現主体	待遇表現
qfiL (くれる)	ヤル	し手＝与え手 → 相手＝受け手	与え手	〈謙譲〉 we:sjiL
	クレル		受け手	〈尊敬〉 qfi: wa:L
juiL (もらう)	モラウ	し手＝受け手 ← 相手＝与え手	受け手	〈謙譲〉 ugaM

参考文献

- 岡田幸彦 2000 「現代日本語の空間移動を表す動詞と場所を表す名詞の構文論的結合関係ー動詞の語彙的意味の記述への応用」『マテシス・ユニヴェルサリス』2-1:99-128、獨協大学外国語学部言語文化学科
- 岡田幸彦 2003 「物体の空間移動を表す他動詞の語彙的意味記述のための試論ー補語的名詞（句）との結合関係に基づいてー」国松昭他編『松田徳一郎教授追悼論文集』:102-114、研究社
- 奥田靖雄 1968-1972 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（言語学研究会編1983所収：21-149）
- 金田章宏 2001 『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
- 言語学研究会編 1983 『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
- 下地賀代子 2006 『多良間方言の空間と時間の表現』（学位論文、千葉大学）
- 下地賀代子 2014 「南琉球・多良間島方言の格再考ーni:格、Nka格を中心に」『国立国語研究所論集』7:227-249
- 下地賀代子 2016 「南琉球・多良間島方言の「移動の表現」に関わる動詞の類型（1）ーヒト＝イキモノの移動の表現ー」『琉球大学 言語文化論叢』13:45-65
- 鈴木重幸 1957 「日本語の動詞のすがた（アスペクト）について（言語学研究会報告）」（金田一春彦編1976『日本語動詞のアスペクト』所収：63-81、むぎ書房）
- 須田義治 2010 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房
- 多良間村教育委員会 2017 『つかえる たらまふつ辞典ー多良間方言基礎語彙ー』
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 宮島達夫 1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』（国立国語研究所報告43）秀英出版

謝辞

本稿の執筆にあたっては、査読者の方々より大変有益なご指摘およびご助言を賜った。ここに記して深く感謝申し上げます。なお本稿は、下地2006の第Ⅰ部「〈空間〉の表現」第2章「「移動の表現」論」の一部を加筆・訂正したものである。適宜用例の差し替え、本文の表現を改めた他、2節の分析・考察の段階から「空間的な位置変化」を表す動詞（2-1-3）の項を設けた。

注

- 1 寺村1982は「コト」（＝「客観的な叙述の内容の表現」）の観点から「述語」（＝「具体的なコトを描くかなめとしての叙述語」）を「動的事象の描写」、「性状規定」、「判断措定」、「感情の表現」、「存在の表現」、「コトを含むコト」の6つに分類している（pp.79-85）。そして「動的事象の描写」の文にさらに、「二者の関係の表現」、「移動・変化の表現」、「「入レル、出ス」表現ー働きかけと移動の複合」、「「変エル」表現ー働きかけと変化の

複合」、「授受の表現－働きかけの対面と移動の複合」という5つの類別をみとめている (pp.87-138)。なお「述語」の6分類について、前3つはそれぞれいわゆる動詞文、形容詞文、名詞述語文に対応する。また「コトを含むコト」とは、名詞の代わりに「補語と述語が結びついて、一つのまとまった叙述内容を表わすものを、補語としてとる」述語を指している (p173)。

- 2 下地2016の注2の繰り返しになるが、本研究では「語彙・文法的な意味」という用語を、鈴木1957の「語彙＝文法的な（語彙＝形態論的な）カテゴリー」に準じながら、「文法的」という部分を統語論的ふるまいにまで拡大して用いている。奥田1994、須田2010でも同様の規定が行われており、須田2010では「動詞の語彙的な意味のなかのカテゴリカルな側面にもとづく」分類を「語彙・文法的な系列」と呼んでいる (p265)。
- 3 本研究で用いている音韻表記の一部について、sjは [ʃ]、cjは [tʃ]、zjは [dʒ, ʒ]、hは [h, ç]、fは [ɸ]、vは [v ~ ʋ] である。またN、M、Lは成節的な子音であり、その音価はそれぞれ [n, ɲ, ɳ, ŋ, …]、[m]、[l] である。また促音はqであらわす。
- 4 想定される現代日本語共通語（以下単に共通語）あるいは古典日本語との対応語形、または意味的に対応する語などを記している。また、共通語がそのまま用いられている場合はカタカナのイタリックで示す。なお、その語彙的意味が大きく異なる場合は語彙の意味において対応する語を示し、適宜 { } で注を付す。
- 5 助辞など文中に現れていない要素は () に入れて示している。{note.} は注記である。
- 6 多良間島方言の-Nkaには、格助辞として機能するものと「中、内」という語彙の意味を名詞に付加する派生接辞（あるいは接辞化の過程にある語彙的要素）との2つがある。詳細は下地2014を参照されたい。
- 7 具体的には「おく、いれる、はずす、だす、もってくる、はこぶ」の6つの動詞を直接的な考察の対象としている。また、「とりつけ動詞」と「とりはずし動詞」が「移動」を表すかという問題について、「カテゴリーの連続性」を動詞の語彙的意味との関係で具体的に考察するためにも、(中略) 移動の特定の部分（開始あるいは終了）を示す動詞をも含めてとりあげる」と述べている (p105)。
本研究でも、「とりつけ」「とりはずし」と「うつしかえ」の間にみられる「カテゴリーの連続性」を重要視し、これらを「モノの移動」を表す動詞に含める立場をとっている。
- 8 ここでいう「ba格」とは第二対格であり、本研究では、第一対格のju格にのみ後接して現れる係助辞＝baとこれを区別して扱っている。なお、これらの＝baの位置づけについては現在も考察中であり、近く稿を改めて示す。
- 9 例えば、以下の用例の「(月桃の) 葉」は〈手段・方法〉としか解釈されず、ni:格には〈包含〉の第二の対象を指し示す用法はないと言える。

cf. sjaniN=nu pa:=ni: mucu=u ciciM.

月桃＝の 葉＝に 餅＝を 包む

月桃の葉で餅を包む。

- 10 なお、共通語の「出る」に対応する多良間島方言の動詞には、idiL (／ NdiL)、nuNdiL という2系統3種ある。前者は古典語の「出(い)づ」に対応していると思われるが、後者については不明である。
- 11 下地2006より(p93)。Nka格は専ら空間的な意味を実現する形式であり、かつその形式をとる名詞の指し示すトコロは、周囲との間に明確な境界を持つ「一定範囲の空間」であることを示した。
- 12 奥田1968-1972は、この「授受の表現」に関わる動詞と名詞のくみあわせを、「所有のむすびつき」と呼んでいる。そして、このむすびつきについて、「対象へのはたらきかけとはちがって、この種の連語には対象をめぐる人間の所有関係が反映している。もちろん、所有権の移動は、対象が動産であれば、その空間的な移動をとまなうだろう。」だが、この「所有権の移動にとまなう対象の空間的な移動は、所有のむすびつきをあらわす連語の成立にとって、どうでもいいこと」であり、この事実が「所有のむすびつきを物へのはたらきかけからくべつする、たいせつな根拠」となると、述べている(言語学研究会編1983:80)。
- 13 授受の表現において、「し手」と「相手」の間を移動するのは狭い意味でのモノに限られないが、ここでは特に物体の「具体的な空間的な移動」の表現を考察の対象とすることから、「モノ」という表記によって示している。
- 14 この、形態的には二項対立であるにも関わらず意味的には三項対立を示すという構造は、八丈方言のkerowa(くれる)とmurouwa(貰う)の対立と同様である(金田2001:349)。
- 15 なお、インフォーマントの語感では、baN: qfiru(私にくれろ)とbaNke: qfiru(私へくれろ)とでは、後者のほうが「やわらかい」表現となるようである。
- 16 多良間島方言には共通語の「くださる」に相当する本動詞はない。後述するjuiLについても、共通語の「もらう」の敬体動詞は〈謙譲〉の動詞「いただく」であるが、多良間島方言にはやはり「いただく」に対応する動詞は現れない。
- 17 寺村1982でも、共通語の「やる」と「くれる」について次のように指摘されている。「このような、話し手を中心とした動きの方向性という点で、ヤル、アゲルは「行く」と、クレル、クダサルは「来る」と共通した性格をもつ語だといえるだろう。さらに、前者は自己の範囲内のものを指す「コ」の系列と、後者は話し相手の範囲のものを指す「ソ」の系列と共通している」(p134)。
- 18 なお、juiLには補助動詞としての用法はないようで、この場合は〈謙譲〉を表わすjuiLの敬体動詞ugaMが用いられる。ugaMは「拝む」に対応する多義語であり、その意味の1つにjuiLの敬体動詞(いただく、頂戴する)としての用法がある。
- 19 je: < jui: